

デカブリストの性格

岩 間 徹

は し が き

一八二五年十二月ツァーリズムにたいして叛亂を起こした革命家たち、いわゆるデカブリスト Декабристы (十二月黨員) は農奴制度の廢止と專制政治との鬭争とを二つの大きな課題とするロシアにおけるブルジョア革命の最初の組織的代表者であつたといわれる。

ところで「デカブリスト」と總稱されている十九世紀の二〇年代の革命家たちは決して單純一色の性格をもつていたわけではない。たしかにデカブリストが農奴制度の廢止および專制政治との鬭争という二つの課題——正確には二つの課題というよりは、農奴制度がツァーリズムの經濟的基礎であつたが故に、兩者は統一的課題であつたのであるが——を課題としたことそれ自體においてはロシアにおけ

るブルジョア革命の擔當者として共通の性格を帯びてゐるであらう。しかしながら當面の課題を如何に解決するか、課題解決の方向乃至内容において彼らの間には顯著な性格の相異が認められる。そしてこの性格の相異は、十二月黨結社⁽¹⁾すなわち「南方結社」 Южное общество と「北方結社」 Северное общество これら兩結社とは別個の存在をつゞけ、やがて「南方結社」と合同せる「統一スラヴ結社」 Общество соединенных славян、これら三つの政治的秘密結社のそれぞれの革命的イデオロギーのなかに反映せられている。

デカブリストと總稱せられているものが結局は以上の三つの「結社」にそれぞれ結集せられたこと、またそれぞれの結社がそれぞれ独自の革命的イデオロギーを展開していること、かゝる事實に着目するならば、このことだけでも

デカブリストの性格を單純一色のものとして公式的に片附けることは到底できないであろう。しからば彼らはどのように異なる性格をもつていたか、その性格の相異は何に基くか、またそれはロシアの革命的インテリゲンツィアの歴史の上にどのような意義をもっているか、以上のことを追求しようとするのがこの小論の目的である。

1

デカブリストのなかでパーヴェル・ペステリこそはおそらく最も重要な存在であろう。プーシュキンは一八二二年四月九日の日記に「言葉の完全な意味で賢いひと」であり、「私の知っている最も獨創的なひとたちの一人だ」とペステリを評している。⁽¹⁾ 彼は「南方結社」の指導者であり、「南方結社」のいわば象徴であつた。彼の革命的イデオロギーはとりもなおさず「南方結社」のそれであるといつていい。ペステリは十年以上の研究の結實であつたところの『ルスカヤ・プラヴダ』『Русская Правда』のなかに自己の思想を盛り込んだ。⁽²⁾ プーシュキンの評する「獨創的な」ペステリはその勞作においても「獨創的な」見解を披瀝した。「南方結社」の革命的イデオロギーを把握するためには是非とも『ルスカヤ・プラヴダ』を検討する必要がある。

『ルスカヤ・プラヴダ』は一八二二年より一八二五年の間に書かれたが、著者の逮捕と處刑のために完成されなかつた。しかし未完成であつたとはいえ、これはペステリの信念を十分よく示している。彼はもともと十章から成る書物を書くつもりであつたが、出来上つたのは五章だけで、しかもその五章のうち三章は完成したが、あとの二章はまだ下書のままであつた。初めの三章の原稿は「南方結社」において讀まれ、これについて討議が行われ、また結社のメンバーの意見も考慮せられているので、完成せる三章は「南方結社」全體の意見を表明せるいわば共同研究の勞作と認むべきものである。⁽³⁾

『ルスカヤ・プラヴダ』は、ペステリによれば「臨時政府」に課せらるべき「諸々の義務」を内容とし、「臨時政府」が祖國の福祉のためにのみ行動するという「保證」として役立つもので、かゝる綱領がないからこそ諸外國では社會的不安が起つたり、政治的叛亂が起つたりするのであつて、明確に目標をきめておけば、舊レジームを打倒したるのちも平和を確保することができるといふのである。⁽⁴⁾ したがつて『ルスカヤ・プラヴダ』に提示せられた諸綱領は舊レジームを打倒したるのち樹立せらるべき「臨時政府」に課せられるところの「諸義務」であつて、いわば過渡的

統治のあり方を示し、決して恒久的政治形態のそれを示しているのではない。『ルスカヤ・プラヴダ』をめぐり、ペステリにたいして、「ロシアのナポレオン」あるいは獨裁者というがごとき種々の誤解が生じたのは、ひとつには、以上のことを無視せる結果であるとおもわれる。

ところで『ルスカヤ・プラヴダ』は農奴制度の廢止と專制政治との鬭争という基本的課題をいかに解決せんとしているか。(6) ペステリによれば農奴制度は徹底的に廢止さるべきであつた。農奴は解放される。貴族は農奴所有の權利を剝奪される。もし「言葉もしくは行動によつて」これに「反抗」し、あるいはこれを「批判」しようとする「無賴漢」があれば、「最高臨時政府」は直ちに「惡漢」を逮捕し、「國家の敵」また「第一の基本的な市民の權利にたいする裏切者」として最も嚴重に處罰しなければならない。彼によれば、あらゆる社會的階級、身分、その他の區別は廢止せられ、たゞひとつの階級すなわちロシアの市民が存在するのみである。出生や財産に基づく一切の差別は古き封建社會の遺物と考えられ、近代國家においては許容せらるべきではないのである。

ペステリの農奴解放はいわゆる土地なき解放ではない。彼は土地問題については獨自の結論をうち出している。そ

れによれば一切の土地は、私人、國家、教會または修道院のものである、國家によつてその所有權が引き繼がれる。そしてその土地は二つのカテゴリーに分けられる。第一類の土地は農民もしくはその他農業を營まんと欲するものの間に平等に分配される。つまり國家の市民たるものは何人も自ら耕すことのできる一片の土地をうる權利があつたのである。國家の管理下に土地は分配され、その各分配地は五人家族に十分な土地である。かゝる土地の所有權は國家にあり、これを耕作するものによつて賣買、交換もしくは抵當の對象にすることはできない。次に第二類の土地は全く別種のもので、餘剰生産を目的とする。この土地は國家の所有であるが、必要に應じて賃貸もしくは賣却することができる。この土地より上がる収入は國家の基金となり、農耕方法の改良發展あるいは土地を取得せんとする農民の援助のために使用せられる。ペステリはそれに値する農民には貸附をなし、また土地取得の機會を與えようとした。かゝる農民にたいして政府は國家所有の土地を賣ることもできるし、一旦賣つてしまえばいかなる場合にもこれを農民から取り上げることはできない。

土地は人類の共有財産たるべしという説、あるいは私有財産たるべしという説、これら兩説のいずれをもペステリ

は採らないで独自の土地綱領をうちだした。そこにみられるように彼は決して土地の完全、國有化乃至社會化を主張しているのではなく、むしろ大土地所有を排除して小土地所有を創出しようとしている。もし彼の全綱領が實現されたならば、大土地所有者の土地の一部は國有化され、残りは中層農民の所有に歸するにいたつたとおもわれる。しかしながらかかるプロセスを進めることによつてペステリが出生による貴族階級以上に恐れたところの「財産による貴族階級」の支配の出現を果して完全に防ぎきることができであろうか。勿論否である。何故ならば、彼のプランによれば、個人にたいして土地を含むところの富の蓄積、また國家より土地の購入の完全なる自由を與えているからである。「富めるものはいつでも存在するだろうが、それはそれでいいことなんだ」とペステリはいつている。⁽⁸⁾彼のプログラムには各市民をして私有財産の獲得を妨げしめる何ものもないのである。したがつてペステリを以て社會主義者とみなす所説、たとえばゲルツェンのそれのごときは當をえないであろう。⁽⁹⁾

專制政治との闘争においては革命と獨裁を契機として共和政を實現せんとする。彼は「古き封建制」および「貴族制」に死の宣告を與える。そしてその廢墟の上に新しい國

家を建立する。それは萬人のための福祉、少數者のためではなく、多數者のための福祉という政治的原則に立脚する。革命により現行制度を打倒して樹立せられる臨時政府の獨裁を通して（ペステリによればその過渡期は八年乃至十年を要するという）、終局目標たる共和國を實現せんとする。

なおペステリは「單一の分割すべからざる國家」を要望し、連邦制度に強く反對した。ロシアのためにはひとつの國民、ひとつの政府、ひとつの言語、ひとつの政治的經濟的秩序があるのみであつた。したがつて少數民族の獨立・自治は原則として認められなかつた。⁽¹⁰⁾

これを要するにペステリは革命と獨裁とを契機として農奴制度を廢止し、專制政治を打倒し、小土地所有の支配的な共和國を實現せんとしたのであつて、その革命的イデオロギーは小土地所有に自由主義と規定することができるであらう。

2

「北方結社」の革命的イデオロギーはひとまず同結社の指導者ニキータ・ムラヴィエフのいわゆる『憲法』《Конституция》に表現されている。しかしムラヴィエフの『憲法』は、ペステリの『ルスカヤ・プラヴダ』が「南方結社」

にとつて „charakteristisch“であつたと同程度に「北方結社」にとつて „charakteristisch“であつたとはいえない。(11) ペステリおよび「南方結社」の恐らく大多數のメンバーは革命後『ルスカヤ・プラヴダ』のプランにしたがつてロシアに新しい政治的社會的制度を施行しようとしたのであるが、「北方結社」はなるほど一般的にはニキータ・ムラヴィエフの『憲法』に同意していたとはいえ、これを社會に押しつける意圖は毛頭なく、ムラヴィエフの『憲法』も立法議會によつて斷案を下さるべき性質のものであり、したがつて結社は彼の憲法案の詳細には何ら特別の意義を附與しなかつたものようである。

ところでムラヴィエフは農奴制度の廢止および專制政治との鬭争という大きな課題をどのように解決しようとしたか。もちろん彼も農奴解放を宣言した。しかしそれは完全に土地なき解放、あるいは土地なき解放に近きものであつた。實はこの點について彼はその『憲法』の三種の記録(『憲法』には二つの版がある。第一版より第二版の方が完全に近い。なおその他第三の原稿もある。これはムラヴィエフが一八二六年獄中で記憶のまま書いて査問委員會へ提出したものである。以上三種の記録は相互に補足し合うがしかしそれぞれの内容は本質的に異なるものではない。)(12)を

通じて意見を變えているのである。すなわち『憲法』の第一版では農民の解放を宣言しているが、解放農民には全く土地を與えていない。しかし第二版では、「農民の家屋および菜園は彼らの財産として認められる」と述べている。そして最後に獄中で書いた原稿では農民各戸《11BOD》に二

デシャチンの土地を割當てることにしている。このように最後にいたつてようやく農民にいわゆる「コシャチイナディエル猫の分前」が與えられているが、しかしおそらくこのことはただ農民を彼らの村に縛りつけ、地主のために安い勞働力を保證しかくして地主的土地所有をば農民の零落を犠牲として肥大せしめる結果を生み出すだけであろう。「地主の土地は彼らのものとしてとどまる」(第三章)がムラヴィエフの土地綱領の基調をなしているとみるべきで、彼の農奴解放も實は本質的には土地なき解放であるといつていいであろう。

專制政治との鬭争についてムラヴィエフは「それは聖なるわが宗教のおきてにも常識のおしえにも一致せざるものである」として否定し、(13) 穩健な立憲君主政治を實現せんとする。ところがムラヴィエフの立憲君主國においては政治に參與するために財産資格が要求されている。『憲法』の第一版によれば、彼は全市民を政治に參與しうるものと然らざるものとの二つのグループに分け、さらに政治に參與

しうるものを動産乃至不動産所有額によつて四つのグループに分け、それに應じて國家にたいする權利義務を區別した。⁽¹⁴⁾ その財産資格によれば、地主が最も有利であり、全農民階級および都市の中産階級は、埒外に置かれていることが分る。

なおムラヴィエフの『憲法』はアメリカ合衆國の憲法を借用し、連邦制度の原則を採り入れている。單一の分割せられざる國家を主張するペステリ、ロシアが諸民族の連邦たることを希望せるムラヴィエフ、ここでも「南方結社」と「北方結社」との對照は顯著である。

以上のごとくムラヴィエフの『憲法』は、農奴制度の廢止については農奴の身分的解放を宣言するが、ほとんどそれは土地なき解放であり、地主經濟の強力なる支配を認め、專制政治との鬭争については立憲政治をうち出し、この立憲君主國は、地主が最も有力に政治に參與しうる體制であつた。一言でいふならばその革命的イデオロギーは自由主義的『地主的 либерально-помещичий』であつたといつてゐる。

さて「南方結社」と「北方結社」とは農奴制度の廢止と專制政治との鬭争というロシアのブルジョア革命の基本的課題にたいする解決の仕方を異にしていたが、しかしその

革命戰術においては、兩結社とも全く軌を一にしていた。

彼らは「軍事革命」《Военная революция》の支持者であつて、その革命は民衆の参加なく、革命的將軍の指揮の下に従順なる軍隊によつて遂行されるのである。彼らは主として近衛軍によつて行われた十八世紀の宮廷變革を念頭に置いたのであつて、とくにパヴェル皇帝が將校たちの陰謀の犠牲となつた一八〇一年三月十一日のそれによつて彼らは軍人が變革を遂行しうるとの確信を抱くにいたつたのである。さらに彼らの確信は軍隊が遂行せるスペインおよびイタリアにおける數次の二〇年代(十九世紀)の革命によつて裏打ちされたのである。しかし一八二五年十二月十四日、ペテルブルグの元老院廣場でツァーリズムと對決したとき、そのような夢は傷ましく破れ去つた。南方におけるより勇敢な組織すら同様に失敗した。けだしそれは全社會的蜂起を恐れた貴族階級の少數の若き背教者たちの革命的爆發にすぎなかつたからである。

ペステリは大衆を政治的要素として餘り信頼しなかつた。叛亂の前夜に彼は次のごとく主張したといわれている。「大衆は實在せざるものである。それは個々のひとが大衆の實在を望んでいるだけのことにすぎぬ。⁽¹⁵⁾ また叛亂勃發の直前、同志ロレルに向つて、一八二六年まで待つて、タ

ガンログに赴き、皇帝に向つて、ロシアを改革すべき緊急必要のあることを訴え、皇帝の聴許を乞ひ、それがために結社を破壊して、これ以上の發展をさし控える決心をしたという絶望的告白をしているが、⁽¹⁶⁾これも大衆に信を置かざる一革命家の悲しき妄想であつたといえよう。なお同じく「南方結社」のムラヴィエフ・アポストルとベストゥージェフ・リューミンも叛亂のとき作成せる宣言に「教會の眞實の子として」いかなる「犯罪」も企てないこと、また「内亂なくして人民の政府を樹立すること」を訴えている。「北方結社」の「獨裁官」トゥルベツコイ公爵は軍隊もしくはその一部の参加は必ずしも「武裝革命」を意味しない、ある種の形式の示威もしくは「武裝的威迫」はツァーリ政府をして憲法の要求に應ぜしめるであらうと考へた。⁽¹⁷⁾軍隊は交渉の行われている間適當な場所に整然と待機する。革命は合法的性質を保持せねばならぬ。さもなく、もし暴力が始まり、軍隊がこれに参加するならば、「惡魔ですらこれをとどめることはできないであらう」というのである。⁽¹⁸⁾

トゥルベツコイは常に社會革命を怖れていた。約二〇年後に彼は次のごとく書いている。「現在の政治形態は永久に存立しえない。そしてもしそれが人民の蜂起によつて變革されるなら禍なるかな！」⁽¹⁹⁾

およそデカブリスト叛亂にいたるまでのロシアにおける反政府運動は通常二つの形において表現されていた。すなわち一つは宮廷の小さな徒黨によつて指導された宮廷變革であり、いまひとつはステンカ・ラージンやプガチョフの叛亂のごとき大衆蜂起であつた。南北兩結社の指導者は宮廷變革の傳統を繼承せんとし、大衆蜂起をむしろ恐れていたのである。デカブリストを敗北せしめたのは、ニコライが自分の葡萄弾を以てしたのではなく、むしろプガチョフ叛亂の亡靈であつたというパクロフスキーの所説は機微に觸れているといえよう。⁽²⁰⁾この亡靈にたいする恐怖が決定的な瞬間において彼らの意志を挫き、ロシアにおけるブルジョア革命を永久に不可能ならしめたのである。

3

南北兩結社の革命戰術は、人民の参加なき革命であつたが、この點で異色のあるものとして注目すべきは「統一スラヴ結社」のそれである。

この結社では少數の將校によるクーデターのみでは不十分で、大衆の参加が必要であり、彼らの援助なくしてはあらゆる努力も失敗に歸すると考へた。「軍事革命は——と「統一スラヴ」の有力メンバーの一人は述べている——「た

とえ目的をよりすみやかに達成するとしても、次のことの故に一層危険である。けだし軍事革命は自由の名において實行されるが、それは自由の搖籃ではなく、自由の棺桶だからである。⁽²¹⁾ここにあきらかにみられるように「統一スラヴ」においては南北兩結社の共通の革命戰術たる「軍事革命」に反對し、社會革命を呼號しているのである。

このような相異を示す史料はなお多く存する。「南方結社」のベストウージェフ・リューミンと「統一スラヴ」の指導者ポリソフとの問答はその間の消息を物語るものといふことができる。ベストウージェフ・リューミンはポリソフに向つて、「我々の革命は一八二〇年のスペイン革命と同様のものである。それは一滴の血も流されないであろう。何故ならそれは軍隊のみによつて實行され、人民の助力なしに行われるだろうからだ」といつた。⁽²²⁾ポリソフが憲法施行を保證する臨時政府なるものとするべき手段方法に關して、また憲法施行中にロシアを統治するものは一體誰なのかを問うたときに、ベストウージェフ・リューミンの答はペステリの提唱せるところのもの、すなわち臨時政府は恐らく十年間權力をとり、新しい政治的秩序を確立するであろうといふことであつた。しかしこの秩序を確立するため政府を任命しなければならぬものは一體誰なんだとポリ

ソフは執拗に喰ひ下がつた。軍人だけなのか？ とすれば一體何の權利があつて、軍人が十年間も國家を支配するのか、またそれは十年間という一時のことではなく、永久獨裁にもなりかねないし、これを防ぐにはどうすればいいんだ？ ベストウージェフ・リューミンはむかつ腹を立てて、「どうして君はそんなことを僕にきくんだ？ 我々は正統の君主を暗殺するつもりでいるのに、その我々が篡奪者の政府なんか容赦しておくてもおもつていいのかい！ どうして、どうして決してそんなことはない！」それにたいしてポリソフは靜かに答えた。「成程その通りだ。だがしかしユリウス・ケーザルはローマのまんなかで暗殺され、彼の偉大と名譽の故に敗れたが、熱烈な愛國者たる暗殺者たちにたいして勝利をえたのは、氣の弱い十八歳の若僧、オクタヴィウスだつた。」⁽²³⁾

このような戰術の相異は兵士にたいする態度にも明かにあらわれている。南方結社に屬するある將校は棍棒を以て兵士を叛亂に参加させることができると主張した。またあるものはウオトカをのませるか、若干の金を與えるだけで十分だといふ。⁽²⁴⁾ムラヴィエフ・アポストルのごときは兵士というものは宗教的動機のみによつて立ち上がらせることができると考え、宗教を武器に用いようとした。事實彼

は叛亂の際にこの方法を用いたのであつて、自分の書いた『正教教義問答書』を僧侶に讀ませて兵士たちを煽動したのである。これらの見解はいずれも兵士を道具として扱っているものであつて、「統一スラヴ」はかかる考えに斷乎反對した。その有力メンバーたるゴルバチェフスキーのごときは、たとい兵士たちはあらゆる複雑な政治的または經濟的問題を分析することができないとしても、彼らにこれらを説明し、どうして革命を起さねばならないかを公然と宣言した方がまだましだというのである。兵士たちとこの問題について腹を打ち割つて議論すべきで、「狡猾なマキアヴェリズム」は甚だよろしくないことだといふのである。⁽²⁵⁾

「統一スラヴ」の大多數のメンバーの希望せる革命というのは、大衆が單なる傍觀者としてとどまるのでなく、その積極的な參與者となるような革命であつた。そしてこの革命にはひとり農民のみならず、都市の勞働者も來るべき民主主義社會確立のために參加していいのだといふのである。事實「統一スラヴ」はキーエフの勞働者と接觸しようと努め、この目的のためにメムバーの一人アンドレーヴィッチをキーエフ市へ派遣し、蜂起にとつてとくに有利な條件があるかどうかを調べさせようとした。たとえば勞働者による兵器庫の占領は大きな戰術的意義をもつだろうといふこ

とを彼らは十分よく知つていたのである。勞働者たちと話して、アンドレーヴィッチは彼らのなかには自分たちの悲惨な状態を自覺し、衷心より自分たちを救済せんと願つてゐるものがあるといふことを確かめることができたのである。⁽²⁶⁾ これは「統一スラヴ」の眞の革命的精神を示すものであつて、「南方結社」のそれ、況や「北方結社」のそれとは天地霄壤の差が認められる政治哲學である。少數の軍事革命的グループよりはむしろ人民にたいする信頼、專制主義と民主主義との來るべき對立抗爭を大衆と特權富裕階級との鬭争とみること、すなわちこれである。

ここにおいてデカブリストのなかに「統一スラヴ」のメンバーの存在せることは、デカブリストの性格を規定する上に重要な意味をもつてこないわけにはゆかぬ。一般にデカブリストは貴族インテリゲンツィア *Аборт-интеллигенция* と規定される。彼らの大多數は地主貴族の出身であり、青年將校であつた。祖國戰爭の間にロシアにおける教養ある青年はほとんどすべて軍服を着ていた。十九世紀の二〇年代は將校とインテリゲンツィアとは同じものであつた。そしてインテリゲンツィアの優秀にして勇敢なる部分の間には革命的氣分が横溢していた。デカブリスト運動はまさにその集中的表現であつた。したがつてロ

シアにおける革命的インテリゲンツィアの歴史においてデカブリストを以て『貴族インテリゲンツィア』と規定することは必ずしも誤りではない。ところで『貴族インテリゲンツィア』の革命運動における限界はすでに革命戦術において示唆せられたところである。つまり大衆の「實在」を認めず(ペステリ)あるいは民衆の蜂起を恐れて(トゥルベツコイ)、革命を人民の参加なき革命に限定せることである。ところが「統一スラヴ」はあきらかにこの限界を超えている。したがって彼らは必ずしもその革命戦術において『貴族インテリゲンツィア』の枠に拮りえない。そのことは彼らの出身層の社会＝経済的基礎を検證するならばさらに明かになるであろう。彼らを以て直ちに二〇世紀のロシアの革命家の眞の先驅者であつたとするマズール(A. G. Mazur)の説はしばらく保留するとしても、⁽²⁷⁾ すくなくとも十九世紀の四〇年代をへて、六〇年代・七〇年代に主流を占めるところの『雑階級インテリゲンツィア』(разночинный интеллигенция)の萌芽ともいふべき性格をもつていたといえるのではあるまいか。

4

デカブリストの革命的性格は決して單純一色ではなかつた。「南方結社」と「北方結社」との一本化がペステリの最後の努力によつてもついに實現しなかつたこと⁽²⁸⁾あるいは「南方結社」と「統一スラヴ」との合同と雖も、ゴルバチェフスキーの記しているように、「おしなべたる有頂天のさなかに」「一種の物悲しい調子」が認められること、⁽²⁹⁾ これらはいずれも彼らの革命的性格の相異の然らしめるところであつた。このことは決して各結社の指導者の見解の相異ということだけで説明のつく問題ではない。何故ならこの見解の相異を必然的ならしめたものは何かという疑問が當然起つて来るからである。その主たる原因はもつと深いところに、つまり各結社相互において比較的顯著に異つていたところの社会的＝経済的基礎にあるとみることができるのではあるまいか。

いまここに『デカブリスト地主經濟關係資料拔萃』『Извлечение из материалов о помещичьем хозяйстве декабристов』を史料として利用する。これは根本史料——十一の縣『губерния』の地圖書および地圖^{атлас}にたいする經濟的註釋——並びに元老院『Правительствующий Сенат』

の前アルヒーフに保存せられたる系譜紋章局と司法省との文書、これらの拔萃である。これはイエ・エヌ・シチェプキナ (Е. Н. Щепкина) が『デカブリストとその時代』《Декабристы и их Время》に載せた一覽表である。³⁰⁾デカブリストの中三十三家族(三十九人)をアルファベット順に並べ、彼らの家庭の經濟狀態を摘記している。編輯者はさらに一層の完璧を期するために、一八二四—二六年刊行の『元老院通報』《Сенатские Извещения》より引用せる史料によつて、若干のデカブリストについて傳えられたる諸報道に脚註を施して補つてゐる。この補足史料はすべてエス・ヤ・ゲッセン (С. Я. Гессен) によつて引用せられたものである。

いまこの史料に擧げられてゐる三十九名のデカブリストを „Aus den Memorien eines russischen Dekabristen“ 所收の結社別「名簿」(Verzeichniss)³¹⁾——一八二六年六月一日ニコライ一世の命令によつて最高刑事裁判所へ引渡された秘密結社参加者の名簿——によつて、「北方結社」「南方結社」および「統一スラヴ結社」のそれぞれにえり分けてみる。そしてさらに彼らを判決の輕重を規準にして重い方から順次排列してみる。それには同じく „Aus den Memorien eines russischen Dekabristen“ 所收の別の

名簿³²⁾すなわち判決を受けたものの名前、その判決(一八二六年七月十日)、至高命令による判決の輕減(同年七月十一日)を記せる一覽表を利用した。なおこの點については前掲『デカブリスト地主經濟關係資料拔萃』にも判決の種類《разряд》が附記せられてゐる。以上のごとく分類排列せるデカブリストについて、それぞれの家族の所有せる農奴數を『デカブリスト地主經濟關係資料拔萃』によつて擧げてみる。

〔北方結社〕

第一類

プーシユチン・イヴァンおよびミハイル・イヴァノヴィッチ

四五〇

(ミハイルは第十類)

シチェプニン||ロストフスキー・ドミトリ・アレクサンド

ロヴィッチ

一一六(三三)

第二類

キレーエフ・イヴァン・ヴァシリエヴィッチ

一四八

スヴィストウノフ・ピョートル・ニコラエヴィッチ

八八

ミティコフ・ミハイル・フォティエヴィッチ

一四二〇(一九〇)

アンネンコフ・イヴァン・アレクサンドロヴィッチ

四四九五(四一八)

オクローフ・ニコライ・パヴロヴィッチ

一七三(五七)
二九

第四類

フォンヴィージン・ミハイル・アレクサンドロヴィッチ

一六九五(二二三七)

〔南方結社〕

ムラヴィエフIIアポストル・セルゲイ・イヴァノヴィッチ

二五九四

ナルイシュキン・ミハイル・ミハイロヴィッチ 八二七五
オドエヴスキー・アレクサンドル・イヴァノヴィッチ

六六四

第五類

グレボフ・ミハイル・ニコラエヴィッチ

八二六

第七類

トルストイ・ヴラヂミル・セルゲーヴィッチ 六四七
チエルヌイシェフ・ザハル・グリゴリエヴィッチ 四五一一

第八類

チジョフ・ニコライ・アレクセーヴィッチ 五五一
ゴリツィン・ヴァレリアン・ミハイロヴィッチ 一六七〇
ナジモフ・ミハイル・アレクサンドロヴィッチ (一〇八)
シャボヴスコイ・フョードル・ペトロヴィッチ

一二三(二六〇)

第十一類

ムシンIIプーシュキン・エパフロディト・ステパノヴィッチ

第一類

ヴァドコフスキー・フョードル・フョードロヴィッチ

九二八(一二三八)

ダヴィドフ・ヴァシリイ・リヴォヴィッチ

三二八〇(三二五)

ヴォルコンスキー・セルゲイ・グリゴリエヴィッチ

三五四九(一〇四六)

第二類

クリュコフ・アレクサンドルおよびニコライ・アレクサン
ドロヴィッチ

三七一

バサルギン・ニコライ・ヴァシリエヴィッチ

五六

第四類

ボブリシチェフ・プーシユキン・ニコライおよびパーヴェル・

セルゲーヴィッチ

一四三

第七類

リハレフ・ヴラデーミル・ニコラエヴィッチ

六二四

アヴラモフ・イヴァン・ポリソヴィッチ

一六六

チェルカソフ・アレクセイ・イヴァノヴィッチ

一二〇九

第八類

ブルガリ・ニコライ・ヤコヴレヴィッチ

三

(數字脫落のため父が母と共に所有せる農奴數不明。
他の村に母の所有せる農奴數のみを擧ぐ)。

〔統一スラヴ結社〕

第一類

スピリドフ・ミハイル・マトヴェヴィッチ

一八〇一

第七類

クリヴツォフ・セルゲイ・イヴァノヴィッチ

(三〇七)

(但し兄弟のパーヴェルと共有)

第八類

ヴェデニヤピン・アポロンおよびアレクセイ・ヴァシリエ

ヴィッチ

一〇

(アレクセイは第十一類)

(但し親戚と共有)

以上の數字は大部分デカブリストの父母の所有農奴數を合算せるもの。時に父または母の一方の數字のみが擧げられている場合はその限りでない。また父母以外に祖父所有の數字があげられている場合(ベストウージェフ・リユーミン)、また祖母のそれが擧げられている場合(オドエフスキー)、これをも合算したことはいうまでもない。括弧内の數字は本人所有の農奴數である。また『元老院通報』による補足數字は勿論合算した。但し若干の場合『通報』の數字は差押數字のみを示しているので、完全な數字とはいえない。しかしとりあえずこの數字をも合算したことを斷つて置く。

なお「デカブリスト地主經濟關係資料拔萃」には農奴の居住せる縣、郡、村名を記しているが、煩を避けてこれを省略した。

判決の種類《расы》は十一ある。そのいずれにも入らざるもの——一覽表にては「南方結社」のセルゲイ・イヴァノヴィッチ・ムラヴィエフ・アポストルおよびミハイル・パヴロヴィッチ・ベストウージェフ・リユーミン——は絞首刑(最初の判決は四裂の刑)に處せられたものである。

以上の一覽表においては「北方結社」一八家族(一九人)、

「南方結社」一二家族（二六人）および「統一スラヴ結社」三家族（四人）があげられている。ところが最高裁判所へ引渡されたものは「北方結社」六一名、「南方結社」三七名、「統一スラヴ」一三名である。したがって「北方結社」については約三分の一、「南方結社」については約二分の一、「統一スラヴ」については約六分の一のメンバーがこの一覽表にあげられているにすぎない。さらにここに利用した資料『拔萃』は十一の縣に限られている。しかも注意すべきことはこの資料がペテルブルグ縣およびクールスク縣については當つていないことである。かように一部のデカブリスト家族、限定せられた諸縣についての調査に依據せる資料であるので、これを以てデカブリスト家族全般の經濟狀態を結論することはむづかしい。ただ以上のような限定においてすくなくともその全豹を推すよすがとすることはできるであろう。

ところで以上の數字から、南北兩結社および「統一スラヴ」の各メンバーは農奴所有において種々様々であり、ここから一概に公式的な範疇を導き出すのは極めて困難だということである。ただ氣のつくことは「北方結社」においては、「南方結社」、ましてや「統一スラヴ」と比較して、巨大な農奴所有者の存在せることである。また「南方結社」

は「統一スラヴ」と比較すればより大なる農奴所有者が存在せることである。試みに前掲表から各結社につき一家族當り平均數字を算出すると、「北方結社」は一四三八、「南方結社」は一〇九八、「統一スラヴ」はさらに下つて七〇六となる。もとよりこの平均數字は資料の性質上各結社の正確なる平均を示す數字ではない。「北方結社」のそれはあるいはもつと上廻るかも知れないし、「統一スラヴ」のそれはもつと下廻るかも知れない。とりあえず以上の數字はただ農奴所有の多寡による各結社の順序を示す一應の指標として役立つだけのことにすぎない。

前掲の一覽表において明かなるごとく、「北方結社」は他の結社にまして巨大な農奴所有者を包含している。また以上の平均數字においても「北方結社」は最高である。事實「北方結社」のメンバーはかなり多くが名門貴族の大地主出身の近衛將校であつた。資料『拔萃』には擧げられていないが、十二月十四日の「獨裁官」に選ばれたセルゲイ・トウルベッコイ公爵はその典型的存在で、ロシアの古い名門の貴族であり、近衛大佐であつた。かかる大土地所有者層の要望が反映せられたのがほかならぬニキータ・ムラヴィエフの『憲法』であつたわけである。「北方結社」の氣分はペステリ的一本化へのよびかけに應じなかつたとこ

ろにもよくあらわれている。ペステリが南北兩結社の一本化のため最後の努力を拂つた交渉について、「北方結社」の指導者ニキータ・ムラヴィエフはそのときのペステリとの會談を回想して、「全プランは私には實行できないもの、不可能なものまた野蠻で道徳的に反撥を感じるものとおもわれた」といつている。⁽³³⁾「南方結社」の綱領にたいして「野蠻」と感じ、「道徳的に反撥」を感じたところに、「北方結社」の穏和な自由主義的地主的性格の一端が如實に反映されている。これは何といつても多數の農奴をかかえた大土地所有者の氣分であらう。

ただ「北方結社」の性格も一八二五年ルイレエフが指導者となるに及んで變化しつつあることは注目すべきである。四人のベストウージェフ兄弟、オドエフスキー、キューヘリベッケル、トルソン、ザヴァリシン、シュタインゲル、バテシコフ、カホヴスキー、これらのひとびとはボクロフスキーの言葉を借りていえば、「貴族の身分によつてではなく、貴族の出身にもかかわらずインテリゲンツィアであるが故に革命家となつたところの貴族階級のインテリゲンツィア」であつた。⁽³⁴⁾ 彼らの多くは小土地所有者であつて、ほとんど農奴をもたぬものといつてよい。指導者のルイレエフ自身は破産せる小地主の息子であつた。そのキーエ

フにおける財産は政府によつて沒收された。このことは當時二十歳の息子、のちのデカブリストの烈しい抗議を喚起したのであつた。「汝ら權力あり富裕なるものよ！ 汝の心には人間味がないのか？ 苦しめるものより最後のびた一厘までとり上げたとき、汝は感情という感情を全然もたなかつたのか？」と憤怒をこめて彼は書いている。⁽³⁵⁾ このような層、すなわち小地主層が「北方結社」にもいたことは前掲一覽表においても明かである。そしてかかる層の存在が「北方結社」の性格の變化に、重要な役割を演じている。

このことは一八二五年に入つてとくに認められるところであつて、假すに時間を以てすれば、「北方結社」もおそらく「南方結社」とほぼ同様のものになつたかも知れない。ともあれかかる事實は「北方結社」の性格をムラヴィエフ『憲法』の性格を以て、一律に割り切れないことを物語つてゐる。ルイレエフがムラヴィエフの立憲君主政とペステリのジャコバンの共和政との間に立つて動搖し、未來のロシアを「若干の君主政的特徴」を有する共和國、という風に漠然と想像していたところに、「北方結社」の過渡的變貌の混迷が集中的に表現せられているのではあるまいか。

ところで「南方結社」は「北方結社」に比べて大土地所有者はすくない。しかし前掲一覽表に明かなることく、「南

方結社」の指導者たとえばセルゲイ・ムラヴィエフリアポストル（結社のヴァシリコフ支部の指導者）、セルゲイ・ヴォルコンスキー公爵やヴァシリ・ダヴィドフ（兩者はカメンカ支部の指導者）などは莫大なる農奴所有者である。したがってこれらのひとびとの經濟的基礎に關する限り、「北方結社」の指導者たちのそれと大なる差異が存するわけではない。ただ「南方結社」においては「北方結社」に比較して大土地所有者がすくなかつたという事實が重要なのである。「南方結社」のみならず、「統一スラヴ結社」をも含めた南方と北方すなわち「北方結社」とを比較するならば、この對照はより一層顯著となるであらう。

統一スラヴ結社のメンバーの社會的地位はほとんどその全部が最も貧しい貴族階級に屬し、大部分が將校ではあるが、それも下級の將校である。彼らはその僅かな俸給で彼ら自身の生活を賄い、またしばしば彼らの家族をも扶養していた。彼らの兩親は多く名のない貴族で、猫の額大の土地を所有し、農奴所有にいたつてはいわすもがなである。前掲一覽表においても「統一スラヴ」のメンバーたるヴェデニャピンの家では彼の父親（ヴァシリ・ニキーティッチ）はタムボフ縣テムニコフ郡に一〇名の農奴を所有しているが、但しそれも親類縁者と共有しているのである。實質上

彼らは中流階級の貴族(middle-class noblemen)である。⁽³⁶⁾「未だ嘗て權力の毒を味つたことのない」ひとびとであり、政府がそのビューロークラシーを裏打せる煉粉となるひとびとである。⁽³⁷⁾ なかにはウラデーミル・ベチャスノフの母のごとく救恤に依存しているものもある。またあるものは政府の屬官で、イリア・イヴァノフのごとく曖昧な階級のものもあるし、ティモフェイ・ドゥンツォフは農民出身で偽造パスポートと稱號によつて、パヴェル・ヴィゴドスキーと名乗つて官廳の地位を獲得したのである。したがつてかようなひとびとがロシアの將來についてニキータ・ムラヴィエフやセルゲイ・トゥルベッコイと同様な考えをもたなかつたことは當然であり、彼らの政治的綱領と首都ペテルブルグで「重い肩章」^{エポールゼット}をつけていたひとびとのそれとの間に大きな懸隔のあつたことは當然である。さらに「統一スラヴ」の過激派破産貴族（ゴルバチエフスキー、ポリソフ、クズミン）は「南方結社」の自由主義的貴族（ヴォルコンスキー公爵、ムラヴィエフリアポストル、ベストゥージュエフリユーミン）ともその社會階級において相異し、したがつて「統一スラヴ」は「南方結社」ともその革命的イデオロギーを異にしたのであつて、兩者の合同が決して完全融合でなかつた所以も理解されるであらう。

むすび

デカブリストの革命的性格が單純一色のものではなかつたことから、ロシアにおける革命的インテリゲンツィアの發展において、デカブリスト運動の占める歴史的地位が新しく注目を惹くであろう。

「北方結社」および「南方結社」に關する限り、大體において、デカブリストはその社會經濟的基礎によつて「貴族インテリゲンツィア」《дворян-интеллигенция》であつた。彼らは「貴族インテリゲンツィア」として共通の革命戰術をとり、革命運動における限界をはつきり示していた。ところが「統一スラヴ」のひとびとに關する限り、彼らは「貴族」とはいえ、實質的には中間階級であつて、またその革命戰術において「貴族インテリゲンツィア」の限界を超えている。その意味において彼らは十九世紀の五〇—七〇年代にロシアに構成せられた社會層「雜階級インテリゲンツィア」《разночинно-интеллигенция》の先驅者であつた。

さてデカブリストは、世紀を異にし、世代を異にするとはいえ、農奴解放、專制政治との鬭争において、十八世紀末葉のインテリゲンツィアとは同じ鎖の一環であつたとい

える。我々は十八世紀末葉の革命的インテリゲンツィアの代表者として、『ペテルブルグからモスクワへの旅』《Путешествие из Петербурга в Москву》(1790)の作者ア・エヌ・ラデーシチェフを擧げることが出来るであろう。この『旅』はいうまでもなく農奴解放と專制政治との鬭争を課題とせる革命的著作であつた。『旅』は正に「文學的一揆」《литературный бунт》であつたといえる。⁽³⁸⁾『旅』並びに『旅』の作者については幾多の問題があるが、その一つとして『旅』の作者が果して蜂起へのよびかけの意圖をもつていたか否か。ポクロフスキーによれば、ラデーシチェフは國民に訴えようなどとは毫も考えていなかった。彼の著書は極めて僅かな部數しか印刷されず、しかもそれは解りにくい言葉で書いてあつた。これはインテリゲンツィアがインテリゲンツィアのために書いたものである。(„Hier hat ein Gebildeter für die Gebildeten geschrieben“)と主張している。⁽³⁹⁾以上は『旅』出版の廉で逮捕されたときにラジーンシチェフの行つた證言に依據している。しかしエム・ヴェ・ジーンシュカはアカデミア版の《『旅』研究の資料》にのせた論文『ラデーシチェフの社會政治的見解』において、事情さえ許したならば、この作者の革命組織の役割は大きかつたであろうという。しかしラデーシチェフ自身の表

現に従えば、そのためには「まだ時が来なかつた、運命が成就しなかつた」『*Не пришла еще година, не совершился Судьбы*』のである。社會の自覺が鉛のごとき眠りのさなかにあるとき、蜂起にたいする炎のごときよびかけも空虚に響き渡るのみであつた。周圍から積極的支持を與えられなかつたので、そのよびかけは次第に足かせをはめられて自由を奪われた孤獨なる思想家の悲劇的な斷腸の叫びとなつて行つたと述べている。⁽⁴⁰⁾ここではラデーシチェフの『自由』『*Вольность*』と『詩に依據して蜂起へのよびかけの意圖があつたと主張しているのである。もし蜂起へのよびかけの意圖をもつていなかつたとすれば、彼は南北兩結社のひとびとと直結するであらうし、またもし蜂起へのよびかけの意圖をもつていたとすれば、彼は「統一スラヴ」のひとびとと直結するであらう。しかしいずれにせよ、ラデーシチェフが『旅』において農奴解放、專制政治との鬭争を課題とした點において、たしかに彼はデカブリストの父といつていいのではあるまいか。

さらにデカブリストはいわゆる「十二月黨神話」を媒介として「五人の十字架上の死」を讃美せるゲルツェンを奮起せしめ、⁽⁴¹⁾さらにそれはゲルツェンを通して十九世紀後半のナロードニキ運動とむすびついてゆく。そしてこのナロ

ードニキ運動の擔當者こそは、「雜階級インテリゲンツィア」であつた。かかる社會層の萌芽的なものがすでに「統一スラヴ」のひとびとのなかにあることを我々はみのがすことができない。

デカブリスト運動は結局ツァーリズムの前にあえなく敗れ去り、何ものをも破壊せず、また何ものをも創造しなかつたところの不妊のブルジョア革命であつたとはいへ、デカブリストの性格のうちに、十八世紀末葉の革命的傳統を繼承し、さらに十九世紀後半の革命運動への發展の萌芽を孕んでいたことにおいて、ロシア革命史上注目すべき地位を占めているといわなければならない。

(一九五二・一二・三)

註 1 十二月黨結社の基礎を置いた最初の組織は一八一六年二

月九日ベテルブルグで結成された「救済同盟」『*Общество спасения*』、またの名を「祖國の眞實にして信仰深き息

子たちの結社」『*Общество истинных и верных сынов Отечества*』であつた。その創設者はア・ムラヴィエフを

始めとする貴族出の近衛將校であつた。この「同盟」で重要な役割を演じたのはベ・ベステリである。ところが

早くもこの最初の組織において穏和派と過激派との分裂が生じ、「同盟」は一八一七年に解散され、新しい規約、

いわゆる「綠書」『*Зеленая книга*』の完成とともに、

一八一八年に「福祉同盟」Соезъ благожелателя が結成された。しかしこれも同様分裂の危機に瀕し、一八二一年一月モスクワ會議において偽裝解散を行うことになったが、事實上これは「同盟」の壊滅であつた。デカブリストの一部は革命的事業の停止を欲せず、南方の第二軍管區においていわゆる「南方結社」を組織し、トゥリチンを本部とし、ペステリを指導者とした。「南方結社」に遅れて一八二二年の秋に「北方結社」ができ、ペテルブルグを本部とし、最初はニキータ・ムラヴィエフ、やがてルイレーエフを指導者とした。かように十二月黨結社の歴史において分裂の要素はそもその當初から存在していたことが分る。なお南北兩結社とは別個に一八二三年ボリソフ兄弟によつて組織せられたのが「統一スラヴ結社」で、その「結社」の起源は一八一七年に組織せられた「最初の調和」«Первое согласие»その後の「自然の友の會」«Общество друзей природы»にある。「統一スラヴ」の本部は南露の小さな町レシチンにあつた。一八二五年秋「南方結社」と合同した。

- 2 Пушкин, Сочинения (Перебъры, 1903) V. 347.
- 3 Kulczycki, Geschichte der Russischen Revolution, Band I. s. 140.
- 4 Восстание Декабристов «Декабристы и бунты» (以下 БДと略す) IV. 204, 222, 275, 349.

5 ibid., IV, 90-91. Пестель, II., Русская Правда «Русская Правда» 10-11.

6 『ルスカヤ・Правда』の内容については Anatole G. Mazour, The First Russian Revolution, 1937, pp. 98-116; Kulczycki, op. cit., ss. 140-163 参照。

7 「今世紀の顯著な特徴は人民と封建的貴族階級との明白な闘争である。この闘争の間財産による貴族階級なるものが勃興しはじめるが、これは封建的貴族階級以上に有害である……何となればそれは全人民を隷屬せしめるからである。」(Русская Правда 59)。

8 Anatole G. Mazour, op. cit. p. 114.

9 A. Herten, Du developement des idées révolutionnaires en Russie, 74 邦譯「ロシアにおける革命思想の發達について」(金子譯、岩波文庫、一〇二頁)。なおクルツィスキもペステリの理論が多くの著述家の考えるように強度に社會主義的思想によつて貫かれていたとは信じないと主張している。(Kulczycki, op. cit. 163)

10 例外としてポーランドがある。但しこれですらペステリは簡單に許可しているわけではない。それには二つの重要な條件を附している。すなわち、(1)ポーランドはロシアと永久同盟を締結する。ロシアはポーランドの獨立を保證し、その代りポーランドはロシアが第三國と戦う場合にはロシアのため自國軍を使用することを誓う。(2)ポ

ーランドはロシアと同様共和政體をとるべきだといふのである (Русская Правда, 18-19. 20).

- 11 Kulczycki, op. cit. I. s. 163. ニキータ・ムラヴィエフの見解は「北方結社」全員の賛成をえたわけではなく、たとえばアルブリーツフ、ペ・ベリヤエフ、ドゥミトリ・ザヴァリシン、カホヴスキーおよびルイレーエフなどは共和政の信奉者であつた。さらに「北方結社」にはムラヴィエフの保守的憲法ですらエートピア以外の何ものでもないと考えていたひとびともいた。(Anatole G. Mazour, op. cit. p. 88)

- 12 ムラヴィエフ憲法の内容については主として Anatole G. Mazour, op. cit. pp. 88-94 参照。

- 13 『憲法』前文。但しこの前文は第二版にはない。

- 14 動産(銀ループル)もしくは 不動産(同上)

1	六〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇
2	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇
3	四、〇〇〇	二、〇〇〇
4	一、〇〇〇	五〇〇

1 類の市民は國家のいかなる官職をも保有することができ。2 類の市民は立法院(『憲法』のいわゆる「國民會議」《Народное Собрание》)の上院議員に選ばれることができる。3 類の市民は下院議員以上に進むことはできない。最後の4 類の市民は地方の下級官職に選ばれる権

利、または陪審員として活動する権利をもっているにすぎない。もつともこの規定は『憲法』第二版において修正緩和したが、「國民會議」の議員たるべき資格はそのまま存置した。ムラヴィエフが市民の財産に應じてこれを四級に分けたこととそれ自體はあるいはギリシアのソロンの財産政治 Timocrazia にアイデアをえたのではあるまいか。

- 15 Исаков-Разумник, История русской общественной мысли, СПб. 1911. I, стр. 103 (A. G. Mazour, op. cit., 113)

- 16 Лопер, Записки декабриста, 79. (A. G. Mazour, op. cit., 113-4)

- 17 B.I. I, 18, 36-38, 65-66.

- 18 ibid., I, 18, 37-38.

- 19 ibid.

- 20 Pokrowski, Geschichte Rußlands. 1929. s. 159.

- 21 Горбачевский, Записки и письма, 58. (A. G. Mazour, op. cit., 146)

- 22 B.I. V. 31.

- 23 ibid. V. 63.

- 24 Горбачевский, op. cit., 90.

- 25 ibid. 83-85.

- 26 B.I. V. 477.

- 27 A. G. Mazour, op. cit. p. 153.
- 28 ベステリの一本化への努力は「南方結社」創立以来のことである。その後一八二三年にはしばしば使者をペテルブルグに派遣し(ダヴィドフ、バリヤティンスキー公爵、マトヴェイ・ムラヴィエフ、アポストル)、一八二四年には彼自らペテルブルグに赴いて交渉を行つてゐる。
- 29 「おしなべたる有頂天のさなかに、一觀察者の底の底まで見透すまなざしならば統一スラヴの全部が全部自分たちの結社と南方結社との合同を心から喜んではいないということを認めることができたであらう。彼は一種の可悲しい調子を認めることだろう。それは丁度経験に富む旅人が野蕃人の仲間の一人のお葬いで騒々しい陽氣な儀式をやつてゐるところに居合わせ、死んで行つたものにたいするその父や妻の眼のなかに、群衆には分らぬところの、別離の淋しい感情や一滴の涙をみつけ出すことができるようなものだ。」Горбачевский, Записки и письма, 80.
- 30 Декабристы и их Время, 1932, стр. 367-376.
- 31 Aus den Memorien eines russischen Dekabristen, Leipzig, 1874, ss. 127-131.
- 32 ibid., ss. 132-137.
- 33 В.Л. I, 323-324, 325-326.
- 34 Покровский, М. Н., Декабристы. Сборник статей, М., 1927, 78-79.
- 35 Красный Архив, XV, 170-198, passim. (A. G. Mazour, op. cit., p. 129).
- 36 A. G. Mazour, op. cit., p. 143.
- 37 ibid. 143-4 (Горбачевский, op. cit., 91).
- 38 Материалы к изучению «Путешествия» 1935. стр. 171. (М. В. Жижка, Социально-политические взгляды Раичича).
- 39 M. Pokrowski, Geschichte Rußlands 1929. s. 150.
- 40 M. В. Жижка, op. cit., стр. 172.
- 41 「私は誓つた」とゲルツェンは一八五五年に書いた。「この殺された人々のために復讐することを誓い、そして帝位と祭壇と大砲との戦いに身を捧げた。私はまだ彼らのために復讐を果していない、近衛兵も帝位も祭壇も大砲もすべて残つてゐる、しかし三十年間私はその旗の下に立ち未だ嘗つてそれを裏切らなかつた。」Лепцен, Барто и Думи, I 63.